

学会だより

第73回 日本消化器外科学会総会

矢永 勝彦

(東京慈恵会医科大学消化器外科)

第73回 日本消化器外科学会総会(鹿児島大学大学院消化器・乳腺甲状腺外科学教授 夏越祥次会長, <http://www.jsogs73.jp/>)が2018年7月11~13日の3日間、鹿児島市で開催された。本年は日本消化器外科学会にとり創立50周年の節目の年に当たり、同時に50周年記念式典が開催された。同学会総会の鹿児島市での開催は2004年の第59回(会長:愛甲 孝 鹿児島大学名誉教授)に続き14年ぶりの開催である。また明治維新150周年と鹿児島県にとり記念すべき年で、ちょうどNHK大河ドラマ「西郷どん」の放映時期とも重なり、「維新のふるさと鹿児島市」の名のもとに地元では多くの記念事業が予定されているようで、当たり年といえよう。

今回の総会のテーマは「春夏秋冬一心技の継承」で、春夏秋冬は夏越会長のご教室の同門会誌の題名であり、人生になぞらえた由。即ち、人生の春は「青春」で、青には未熟という意味があり、将来や仕事のことを準備する時期。夏は「朱夏」で、人生を愉しみ謳歌する時期。秋は「白秋」と呼ばれ、人生の実りを収穫する時期。そして冬は「玄冬」といい、人生の中で一番の成熟を迎え、次代へと伝承する時期、とのことである。サブタイトルの「心技の継承」は、日本消化器外科学会創立以来の50年間に築きあげてこられた諸先輩方の外科医としての心と技の教えを守りながら、新しい考え方、手技を加え、次の50年に継承していただきたいという意味が込められているそうである。

例年7月のこの時期の南九州は台風のシーズンであり、過去の西日本での本学会総会でも台風で混乱した年があったが、今年は幸い全く影響なく、さらに時折噴火が報じられる桜島も落ち着いていた。一方、今年の夏は全国的に暑さが厳しく、7月の鹿児島も例外ではなかった。この点で主催者側からノーネクタイ、軽装での参加の呼びかけがありがたく感じられた。

総会の第1日目は夏越会長の開会挨拶で始まり、同日の午前中は瀬戸泰之理事長の巧みな司会の下、過去の歴代理事長(北野正剛先生、杉原健一先生、森正樹先生)による鼎談が行われ、日本消化器外科学会のこれまでの50年の歩み、とくに理事長制となっ

てからの同学会の推移やエピソードが語られた。また第1日目午後には市民公開企画の特別講演「明治維新150年と西郷どん」と題した企画が用意され、島津家、西郷家の末裔お二方による講演を拝聴した。

第1日目の夕刻の同学会の50周年式典に関しては、日本消化器病学会、肝臓学会、外科学会、文科学、厚労省など各関連学会・省庁の理事長や代表者のご臨席・ご挨拶をいただき、厳かに執り行われた。それに続き、社員総会(評議員会)が開催され同学会の実務レベルの報告と審議が行われた。

学会第2日目、3日目は多様なセッションの発表と討論が行われたが、特筆すべきは2日目午前中の学会賞授賞式・受賞講演と午後の会長講演であり、また両日で臓器別(食道、胃、大腸、肝、胆膵)の50周年特別企画「春夏秋冬 心技の継承」が行われ、各臓器を代表する「春:若手、夏:中堅、秋:教授クラス、冬:退任教授」で構成された年代別の講演を、各領域の多数の会員が熱心に拝聴していた。

学会の国際化に関しては、学会員の発表スライドはすべて英語と指定されており、またセッション別にはシンポジウム、ビデオシンポジウム、ワークショップ(一部)は進行・発表も含めすべて英語で行われた。

総会を主催された鹿児島大学はおもてなしの心を大いに発揮され、夏越会長自らが作詞されたテーマソング「春夏秋冬~We are the surgeon.~」が会場(とホームページ)に流れ、コングレスバッグは大島紬、学会2日目には早朝に桜島で5kmの溶岩道路早朝ファンランが企画され、また同日夜の全員懇親会は錦江湾岸のウォーターフロントパークで開催され、鹿児島県産の焼酎、食材(黒豚、黒毛和牛、黒さつま鶏など)、そして鹿児島市発祥の南国白くまが振る舞われた。

最終的に学会参加者は6,574名と、盛況裏に終了した。来年の同学会総会を担当する筆者が所属する東京慈恵会医科大学は、学祖高木兼寛が鹿児島大学医学部の前身である鹿児島医学校に学び、そこで恩師William Willis先生と巡り会ったことから、その鹿児島大学の翌年に同学会総会を担当することも何かの縁と感じ、本年の総会のご成功を心より祝福する。